

《水の精》のアーキタイプ

——その多面性・両面性について(三)——

松 浦 暢

だけが たかく響^こいていた、愛^{いと}しいひとよ。

(第一幕、第二場)⁽¹⁾

(一)

殉教のエロス

——スウィンバーン『シャトラル』——

そなたは覚えてないか 上陸のさい
吹きさぶ風と 青じろい波のため
船着場が びしょぬれの盲人の顔に
みえたとき、ふかい霧のため、丘が
すつぱり かくれたことを。おまえの歌

『シャトラル』(一八六五年)は、スコットランドの悲劇の女王メアリーにちなむ、チャールズ・スウィンバーン(一八三七—一九〇九年)の詩劇(三部作)の最初の作品である。この劇と同名の男は、女王の従者のひとりで、メアリーがフランスから帰国してスコットランド女王となったとき、護衛の役をはたした人物である。ロンサールやブライアッド風の詩の才があり、女王の恋人でもあった。のちに女王の寝室にいるところを発見され、処刑された。劇は、

この史実をもとに展開する。

舞台は、期待と不安に苛まれながら、長い航海ののち、スコットランドの冷たい灰色の海岸へ到着したときの、印象的な情景で、はじまる。スウィンバーンの作品では、《不吉なロマンスの前兆》は、《雨》であるといわれるが、まさしく、この作品は、はげしい風雨のなか、海の波が白い牙をむく海岸への上陸をうたっている。女王のシャトラールへの引用部分のことばが、なよりの例証であろう。《雨》《海》という水の要素の頻用は、この悲劇の前兆を物語っているし、メアリー女王が、人魚的にえがかれているのと無縁ではない。女王の淋しさをまぎらわすため、シャトラールは、恋歌を故国フランスのことばでうたう。メアリーは最初の夫、フランスのフランソワⅡ世の宮廷の洗練された生活のあと、夫の死に伴う急変で帰国する憂目をみる。それだけに、シャトラールの歌は、身に沁むものがあった。

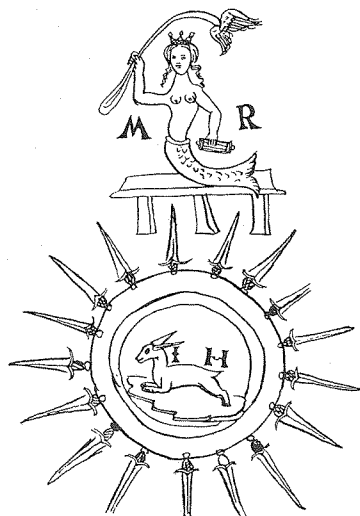
これに先だち、詩の冒頭では、女王の侍女四人が登場、その会話がわかる仕組みである。侍女の名は、みなメアリーであるが、メアリー・ビートンは、シャトラールに熱をあけている。かの女のうたう歌を聞いて、別の侍女

が、「あなたの歌には、海、非情な海の味がひどくするわ／しかも、ちよつぱり苦痛があるのね」という。もう一人の侍女は、そのうたが、シャトラールのうたであることを知っていて、かれが女王様と海をわたるとき、つくつたのよ／あのときは、なんとひどい雨だったでしょう」と補足する。さらに、船上でのダンス・パーティのとき、淋しうに女王が、シャトラールを「ながいあいだ、腕と目の両方で、しっかりと抱きしめていた」様子を語る。ナレーターがメアリー女王を、魅惑的人魚と同一視していることもわかる。女王の目の呪縛力に捉えられたシャトラールも、人魚男だろう。

あの美しい 比類のない まぶた
ながい まつげの愛撫をうける ひとみ
恋しているような 愛のひとみは
男心をとらえ 漁網のように惹きよせる。

（第一幕 第一場）

スコットランド女王メアリーは、よく《人魚》《水の精》にたとえられる。ひとつには、引用のように、たぐいまれ



《スコットランドの女王メアリーの風刺画》

『イギリス国事録』(1567年)

The Public Record Office, London 蔵.

な美貌のためだし、また、ふかい色をたたえた魔力的なひとみの誘引力にもよる。シェイクスピアの『真夏の夜の夢』のなかの「イルカにのった人魚」の詩行は、有名であるが、これをメアリーと結びつける解釈もある。この人魚は女王のことだが、イルカはメアリーの最初の夫、フランス皇太子（Dauphin イルカの意味もある）への言及だという。ロンドンの公文書記録館にある『イギリス国事録』（一五六七）の風刺画にも、人魚にみたてた女王の風刺画がある。中産階級のカルヴィン主義者から評判の悪かった女王は、王冠をかぶり、腰まで裸体のマーメイドとしてえがかれ、腰の両側には、かの女のイニシアル M・R がそえられている。その下の17本の短剣にかこまれた円のなかの I・H は、ジェームズ・ヘバン、つまりメアリーの第二の夫殺害者といわれるボズウエル伯のことらしい。こうした客観的な資料はともかく、スウィンバーンは、かれなりに、波と霧と雨に包まれた、ものさびしく陰うつな風景のなかで、官能的で妖しい魅力をもつ人魚と女王を、結びつけていく。シヤトラールが、女王の寝室のなかで呟く台詞をみてみよう。

わだつみをひく 底引網のうたをうたつて、

裂けた網を ひきあげると、なかに、

かなしげな唇で うたい、頬は

冷たいが、うつくしい肌の人魚が

かかるのを ごぞんじでしようか。

男どもは、その艶めかしい顔にひかれ

かすかな 悩ましい吐息をついて、

紅唇から、柔らかに すすり泣くのを聞くと、

灼熱の恋に落ちて 一夜ねたあと、

あわれにも息たえるのを ごぞんじでしようか。

むかしは、これを他人事にして話せたが、

この人魚のひとみに 接吻した いまは

唇は、それをおもい、痛むばかり。だが

いまは眠ろう、すみやかに 心ゆくまで。

（第三幕 第一場）

人魚が意図的か、意志に反してか、漁網にかかる構図は、無数にある。肉体は漁網か男性に捕えられながら、精神的には、妖しい官能の網目にしっかりと男をつかまえ、隷属させるわけである。従者が、女王と恋愛、女王のダーンリ卿との結婚式の当夜、女王を抱くという、おそろしい場

面は、スウィンバーンのユニークな発想である。しかも、場面をかえて、シャトラールが女王とまちがえ、侍女のメアリー・ビートンを抱くシーンは、昔からのトリックといえ、衝撃的である。ヴィクトリア朝の上品な客間では、海のニンフが、かすかに悩ましい溜息をつき、柔らかにすすり泣いて、人間の男と交わるという情景を容認できるものではなかった。そんな情景は、〈肉欲の收容所〉であり、「かかる表現は、もともと墮落しているうえに、信仰心のある人だけではなく、趣味を解する者にも、不快感をあたえる」ものだ。『アシーニアム』誌

ここには、一八六〇年代から七〇年代にかけて、近代的退廃の美と妖しいエロチシズム、悪の華にまがうような〈宿命の女〉を創造して、当時の上流階級のモラルをゆるがしたスウィンバーンの片鱗がある。ちなみに、懈怠の美女ドローレスをうたったり、同性愛、近親相姦をテーマにした詩集、『詩とバラッド』（二八六六）を刊行して、お上品な偽善的社会にショックをあたえたのは、この一年あとのことである。

男が死と対決し、死に打ち負かされて鮮血に染まるゲーム——それはすでに「フォステイン」でも示されたように、

愛らしいマゾ的女性の快感をよぶものである。『シャトラール』のなかのメアリー女王は、若くハンサムなシャトラールを熱愛しながらも、同衾の場をみられたため、じぶんの名誉を守るため、男を死に逐いやる冷酷さがある。男も、妖艶な女王の色香にわれを忘れ、殉愛の美德のまゝに、処刑の道をしらぬでしよう。純情で可憐な女性の一面と、残忍で淫奔な〈宿命の女〉の他面が、ひとつに融合しているのが、メアリー・スチュアートであろうか。

かの女にとって、シャトラールが、侍女と寝たからといって、別に威厳を損なうほどのことでもない。それだけ、じぶんに隷従している男のことは知っているわけである。それより、じぶんのみた夢に、不吉な〈予感〉をかんじとる。

わたしは まどろんでいました

夢をみなければ 殺される。殺されぬよう

神が、この夢を下さったとおもいながら。

だれかが両足を縛って、踊れと命じました。

踊ろうとすると、うつ向けに倒れ、それは

泣きたい痛さでした。と、紐が切れ

音楽に合わせて 踊りはじめました。

ダンスの相手は 紅の長い線と縞模様の
黒衣をきて、口までマスクしていました。

あごの形で あなたと わかりました
でも その唇は 鮮血に染まった赤糸で
しつかりと 縫い合わされていたのです。

女王は、無意識の予知力で、かれの求める愛をあたえ、あたえることで、かれの沈黙を確保し、かれの口を血で封じる運命となることを、このふしぎな眠りのシンボルのなかにみつけたことになる。現実の場で、同衾の場をみつけられたメアリーは、ダーンリー卿とつぜん結婚することを公表し、それによって、未来の夫の怒りをしずめる方法をとる。歴史的には、メアリーとシャトラールとの情事は、かの女が未亡人のときである。それをあえて、スウィンバーンは、結婚式の夜に変えて異常な劇的効果をねらっている。この〈改変〉が不必要であるとの断定は問題であらう。メアリーは、この恋人を〈赦免〉することもできたのであらうが、愛と名誉のデイレンマに陥る苦悶をスウィンバーンは、えがきたかったのであらう。純情と冷酷という



ギュスターヴ・モッサ画
《シレーヌの餌食》(1905)
ミュゼー・ド・ボザール

両面価値性の女性メアリーが、それによって明らかにになる。

第四幕では、さまざまな忠告者の意見と変わりやすいみずからの気質のあいだで、ゆれ動く。女王は、義兄のマレー卿をよび、「もしシャトラールを裁判にかければ、この身の恥が知れるだけ」といつて、裁判をまたずに殺害を依頼する。いったんは承知するが、神の意志にそむく行為と思ひなおして、マレー卿は、これを拒否する。

そこへダーンリーが入場、シャトラール処刑の命令書に署名を要求する。女王は、逆に男を自由にさせてやってくれと歎願する。この明らさまな、かの女の優しさが、ダーンリーの疑惑をうむ。それを鎮めるため、女王はサインする破目になる。女王は、即刻、処刑を行うよう頼むかとおもうと、こんどは刑の執行の延期をねがう動揺ぶりである。

第五幕では、みつともない話だが、かれの処刑延期を後悔し、かれの独房に行き、処刑延期令状をとりもどそうとする。また生きながらえて、恥を負うよりは、名誉ある死を選ぶのがよいのではと、勧める。あくまでも、女王への愛と誠をつらぬこうとするシャトラールは、令状は、とくに引き破つてありますといつて、女王をよるこぼせる。このあたりは、二人の愛よりは、女王としての威厳と名誉

を維持しようとする残忍な邪悪性を、示しているようである。シャトラールのことばに、女王は異常な解放感と愛の昂まりを感じて、いう。

キスしていいかしら。どうか恐れないうで
あなたへの愛だけを、心に止めて下さいな。

(第五幕 第二場)

また「あなたほど私を愛してくれた人は、いないし、私も、ほかの男を二度と愛さないわ」という殺し文句をいつてのける。シャトラールは、牢獄のなかでの独白で、この非情な美女のことを、こううたっている。

ああ 疲れはてた おれの目に

あの女の顔が うかんでくる。

息づまるような髪に おいをさせ

恋のひとみの炎を ゆらめかせ

甘く邪悪なことばのみちた 酒よりも
なおほてる唇を、この唇に近よせる。

男のすべてを狂わせる すんなりした

腕と、白く輝く胸と喉がうかんできくる。

この恋は 燃えつきて灰となることはない。

心臓の燃えつきた証^{あかし}の わたしの遺灰に

いつまでも 熱と焰を のこすことだろう。

たとえ キリストでも、このヴィーナスは

手に負えぬが、男の血で 唇を赤く染める。

小さい歯から 動脈の汁を吸いあげ

愛らしい、小さい唇を 血でぬらす。

ああ 毒ある真珠^{パール}の歯の 冷酷な美女よ。

(第五幕 第二場)

濃密な髪のおい、赤い唇、しなやかな腕、まぶしいほど白い胸肌^{うで}の、この美しい女王は、《吸血鬼》^{ヴァンパイア}的でもある。

女吸血鬼は、ムンクの絵《愛と苦痛》(一八九三—九四年)で、つとに名高い。髪を乱した赤毛の女が、その豊胸に顔を埋めた男の首すじに噛みつき、血を吸っている。顔がみえないだけに、恐ろしい。スウィンバーンは、怪奇な吸血鬼的イメージを『ヴィーナス賛歌(ラウス・ヴェナリス)』(一八五九年)で、すでに示している。ヴィーナスの誘惑をうけて、騎士タンホイザーは、官能の生活を、女神の宮殿で七

年送る。やがて法皇のゆるしを乞うが、拒絶され、またヴィーナスのもとに帰る。キリストを信仰しながら、ヴィーナスにしばられ、ヴィーナスに魅せられ、贖罪の苦痛をのぞみながらも、かなしい男のはてしない苦悩をえがいた悲劇である。

ゆめか うつつか あのひとの頸^{うなじ}は

この口に吸われて 青あざのあと

その痛む血は、あらわれては、また消える。

やわらかな頸^{うなじ}を そつと 吸えば

青あざのため なお あでやかな頸^{うなじ}。

「ヴィーナス賛歌」第一節

ここには、ながい歴史の年月、男たちの生き血を吸って、永遠の青春をたもつサド的、女吸血鬼のヴィーナスがいる。『シャトラール』の女王メアリーも、キリストへの帰依と祈りをも消し去るような魔力をもっていた。たとえ、生命の血を吸われ墮地獄の憂き目をみようと、この《人魚^{シーウーマン}》の官能美に陶醉していく。じぶんを《底引網》のように、甘美な世界へと、いや応なく惹きこんでいくのである。

第五幕、第三場は、詩劇の冒頭とおなじように、侍女たちがホリルード城の上階の窓に登場、そこから、シャトラール処刑の現場を、見下ろしている。この騎士を愛していたメアリー・ビートンは、その血なまぐさい現場を直視できず、友人に見てもらっている。女王は、シャトラールの最後のことを聞いてから、片手を上げる。刑の執行の合図で、首切りおのが下りて、男は処刑される。観客がどよめく。メアリー・ビートンは、半狂乱で叫ぶ。

群衆は　なんと叫んでいるの「かくて

女王の裏切り者は倒れぬ」。そうよ、

でも、おなじように女王も　倒れるがよい、

これとおなじ運命が　女王におきますように。

かれの無念をはらすため。そうお願いします

これとおなじ運命が　女王におきますように。

(第五幕　第三場)

この侍女の呪詛の願いは、やがてのちに、かなえられることになる。シャトラールは、ほんとうに微笑を浮かべ、女王への不滅の愛を胸に死んでいったのだろうか。それは、

自己犠牲的、女王の名誉をまもるための無私の愛、この生身のヴィーナスへの献身の愛の行為であったのか。ほんとうに言いたいことは、「ああ、非情な女メアリーよ」ではなかったのか。これは歴史の秘密、いや、スウィンバーンが、えがくシャトラールの謎であろう。

ただ、いえることは、この悲劇は、雨風の灰色の海辺への上陸という情景のもとで、始まっていること、その中心人物メアリー女王が、ふかい霧に包まれ、蠱惑的な美しさと複雑で神秘的なポーズで、〈人魚〉として、えがかれ、その誘惑の網目に、シャトラールがとらえられ、死んで行ったことだろう。かれらの恋は、海ではじまり、海辺で終わったのである。たんなる史劇であるといわんよりは、〈超越的な表現美〉の作品といわれるゆえんであろう。

入日と　海のはざまで、愛は

わたしと　たまゆらの恋を楽しみ

金色の波のかなた　昨日のあとを追って

足かろやかに　消えていったわ。

泡だつなぎさと　海のなかに　愛が

訪れ　去っていくのを　みたの。

メアリー・ビートンのうた

《愛》は、シャトラールのものであり、かれは、美少女メアリー・ビートンには切ない美しいおもいでを残し、かれじしんは、女王への殉教のエロスとして去っていった。
《愛は私の宗教、神は、あなた（女王）であるという、かれの教義による凄絶な生きざまであった。

(二)

華麗と悲哀のインスケイプ

——ホプキンス『人魚の幻』——

舟をこいで 岩場についた——引き潮に——
満ち潮になると波にかくれる岩礁に。さきほど
波が音をたてて洗った場所を、いまは、うつすらと
白波のベールが 印をつけていた。一マイル
はなれた後ろには 青い陸地がよこたわる。
ころは 夕昏れどきだった。西空は
プラム色に焼けて、光の矢が岩の割れ目に

あかるく射しこみ、緋色に染めていた。
目をこらすと、^{くれない}紅の光の斑点が薄れたり
集っては、見えないところに 漂った
その割れ目から、^{なかぞろ}中空が すーっと見え
かくれて、まるでエメラルドの湖のなかに
魅惑的に咲く睡蓮の美しい花園かとみえた。
やがて 鼓動する血のように赤い
一条の光が、そのゆらめく輝きを ぬって
ふるえる翼をはばいたが、鋭い視線にあつて
雪のような割れ目に そっと消えていった。

(二——八行)⁽⁸⁾

一八八六年クリスマスの日付のある「人魚の幻」は、そのゆたかな想像力と美しい自然描写、あふれる色彩のイメージ群で、圧倒的である。宗教的で形而上学的な後期の作品に比べて、そこには若き日のホプキンス（十七歳）の想像的な美的体験が格調高く、うたわれている。この詩が《キーツ的》といわれるのも、初期キーツの自然の驚異と美への傾倒があつたからであらうが、ホプキンスの個性の強い《インスケイプ（ユニークで美的な心象風景）》があるのを見



A Vision of the Mermaids

Nowing, break'd a rock—the sea was low—ebb'd back beneath its snowy lids, unseen.
 Which the tides cover in their overflow, Now all things rosy burn'd: the west
 Marking the spot, when they have gurgled dry, had grown [blown
 With a thin floating veil of water hoar. To an orb'd rose, which, by hot pantings
 A mile astern lay the blue shores away; Apart, betwixt ten thousand petal'd lips
 And it was at the setting of the day. By interchange, gasp'd splendour and e-
 Plum-purple, was the west; but spikes of clipse.
 light The zenith melted to a rose of air; [glare
 Spear'd open lustrous gashes, crimson-white; the waves were rosy-lipp'd; the crimson
 (Where the eye fix'd, fled the encrimsoning Shower'd the cliffs and every fret and
 spot was not;) spire [-budded bise.
 And gathering, floated where the gaze With garnet wreaths and blooms of rosy
 And thro' their parting lids there came and Then, looking on the waters, I was ware
 Of something drifting thro' delighted air,
 keen glimpses of the inner firmament: —An isle of roses, — and another near; —
 Fair beds they seem'd of water-lily flakes And more, on each hand, thicken, and
 Clustering entrancingly in bergl lakes: appear
 Anon, across their swimming splendour {In shoals of bloom; as in unpeopled skies,
 strook, [shook Save by two stars, more crowding lights a-
 An intense line of throbbing blood-light rise, [mazed eyes.
 A quivering pennon; then, bor'ye too hiss, And planets bud whereso'er we turn our

J. ホプキンス 《人魚の幻》 自筆原稿と絵

逃してはなるまい。壮大な夕昏れの空と海の織りなすドラマと、それに見とれている人魚、さらにそれを観察するナレーターの〈私〉という構造がある。

〈私〉は、華やかな夕日が海を赤く染める引き潮どきに、人魚の岩場に アプローチする。

あたりは、緋色、紅、バラ色の乱舞する色彩の世界である。西空は〈バラ色の球体〉となり、天頂も赤色に焼け、波も〈バラ色の唇〉、岩場も〈真紅の光耀〉に染まっ、暗紅色の花輪とバラのつばみの花〉でおおわれたようになる。

そのとき 海原を見わたして なにかが
たのしげに空を漂ってくるのが みえた

——そう、バラの島が——いまひとつが近くに

——もつと多くのものが、左右に集まり

はなやかな群なして あらわれるのを、

まるで無人の空に 二つの星は別にして

さらに多くの光の群れがあらわれ、星が

驚きの目で見やるあたりに またたくように。

まのあたりに私はみた 六、七人の人魚が

夕映えを見ようと 深海から浮かび上がり、
群なして集まり 後光を浴びて
つどい寄る あの人魚たちを。

(二七一三七行)⁽¹⁰⁾

紅いろの空から漂ってくる〈バラの島〉がいくつか、
〈はなやかな群なして〉あらわれる。このバラ色の光の群
れは、人魚である。詩では、人魚のグループは、六、七人
とあるが、ホプキンスの原稿に描かれた人魚は、五人一組
で、九グループあるようにみえる。はげしく色彩の揺動す
る空と、朱色の海、それに手前の岩場のあいだに、人魚が
浮かび、夕昏れの光と色の饗宴に、見とれている。数こそ
ちがうが、夕映えに魅せられた人魚は、青年ホプキンスの
〈分身〉とおもわれる。刻々に変化する自然の驚異と妖し
い美に、心うばわれ、〈インストレス(精神的圧迫)〉を感
じた詩人は、じぶん独自の〈インスケイプ(心象風景)〉を
創造し、人魚ファンタジーを生みだしたのでろう。ホプキ
ンズの人魚は、すこし変っている。髪の色は、濃いスミレ
色か、青銅、ときには金髪で多種多様である。頭には大洋
の底にある宝物、サンゴ、貝殻、真珠のちりばめられた

宝冠^{タイアラ}をかぶっている。絵では、いつけん、インディアン^{スカー}の髪飾りをつけているようだ。ホプキンズは、へふるえる膜の半透明な冠⁽³⁸⁻³⁹⁾と、その繊細な美しさを表現している。

人魚の 白い腰からは 銀色の下股^{スカート}

のびて、尾をつつみこんでいた まるで

赤く映える ポンペイの円形模様の壁で、

水の精が 波間に沈むように。彩られた

ヒレは 両肩にかかり、濃いスミレ色か

青銅色の髪には ふかいわだつみの貯える

珍しい くしびの品、サンゴ、貝殻

大つぶパールを ひもととおして飾っていた。

(四八—五五行)⁽¹⁾

人魚たちのあるものは、オウム^{ノイチャラス}貝を引きつれ、あるものは、イルカならぬ巨大貝とたわむれ、あるものは、水のしたたる金髪に、アッシリアの王子よろしく、トルコ石をちりばめ、星状の小花をあしらった花冠をかぶっていた。しかし、この人魚たちは、たわむれ遊ぶだけではない。従来

の人魚のような邪悪性はない。海底の藻くずとなった船乗りに同情し、じぶんたちの重苦しい海の世界にも、いささか厭気を感じているデリケートな感覚の人魚たち、甘美でもの哀しいシレーネなのである。

半円をつくつて 人魚たちは夕陽をみつめた

甘美な悲哀が みんなをとらえた、その

理由^{わけ}はわからないが、悲哀が人魚を

とらえていた、詩人のいうように、

人魚たちが、わだつみ深く沈んだ舟乗りの

弔鐘をならしているのか、それとも

夕闇の重くするしい海底や、数マイルもつづく

みどりの深海を知って、人間——それとも

何だろう——から遠くはなれた冷たい魚が

嫌いになった苦しみなのか、わからないが。

わたしには 人魚の悲しみはわかるが

その理由^{わけ}はわからない。人魚は ただ

海に並んで、胸ふさぐ甘美で もの悲しい

シレーネの歌をうたいはじめた。楽器も

貝殻も 鐘も ウミガメの甲羅の妙やかに

ひびく弦楽器もなく、ただ美しい

声音で 人魚はうたった とおい昔の

歌を 世にもふしぎな ことばで。

(二六一—三一行)⁽¹²⁾

ふつう〈宿命の女〉^{フアン・フアクル}の人魚は、誘惑して人間の男を殺すが、ホプキンスの人魚は、むしろ逆である。死んだ舟乗りを悼み、悲哀に共感している。冷たい人魚の世界を、そこに住む魚を忌避しようとする。じぶんの世界を半ば愛しながらも 反撥しようとする心のディレンマが、〈甘く悲しいうた〉を創造している。心やさしい性格にくわえて、夕映えの美しさを、人間と同じように感じる、すぐれた感受性と審美眼をもち合わせているのも、見逃してはなるまい。それは「落陽に、もの想いにふける人魚の入念なスケッチ的装飾」⁽¹³⁾と解釈することもできよう。魅惑的な色彩描写は、ホプキンス一流の〈ファンタジー・ワールド〉⁽¹⁴⁾へ誘ってくれる。しかし、その華麗な心象風景は、日没が夜に推移し、引き潮が満ち潮に移るとき、消えていく。

落日が 海に沈むと、みよ、ひそやかに

風が吹きおこり、止み、また上げ潮を押しあげ
漂う花をぬらし、ひた寄せる波が、バラ色の
島をのみこんだ。そこで、そつと立ち上がり、
いやます 夕闇のなか、しずかな入江についた。
わたしの岩場は、白くうきあがり、音をたてて
波がその上を洗った、目をこらしてみたが、
あの人魚の姿を、もう二度と みることはなかった。

(二三六—二四三)

ナレーターの〈私〉は、満ち潮になると、岩場をはなれ、入江につき、夜の闇のなか、人魚の姿をさがすが、インストレスに去ったいまは、もう人魚をみるよしもない。岩場を洗う白波の、わびしい音とイメージだけがある。この詩の欠点としては、構成力と統一性の欠如⁽¹⁵⁾があげられるが、それはナラトロジの立場から物語としてみた場合だろう。詩の特徴は、むしろ青年ホプキンスが、美しい夕昏れの海の華麗なバジエントに直面したとき、かれの心に浮かんだ人魚のインスケイプ（心象風景、それに人魚の悲哀への共感が、まるで宗教的な法悦のように、えがかれている点だろう。そこには、また、人魚の〈人間との共感性〉

という新解釈もある。なるほど、人魚は〈鳥女〉シレーネの一面をもち、〈白鳥のような羽もある翼〉(76)、〈先の尖ったカモメの羽根〉(80)、〈高く飛翔する海鳥の群〉(80)と、いろいろの鳥の姿にえがかれている点で、伝統的解釈をふまえている。さらに、空だけではなく、海底にも住居がある点で、〈魚女〉の伝統も、うけついでいる。

しかし、人魚からの邪悪性の排除、人間とおなじ自然美への共感、さらに水死した人間への哀悼などで、きわめて人間的な愛を基盤にしている。ナレーター(の私)は、そうした人魚の美しい対象への美的認識力と知的直観に、ふかい共感をおぼえている。ホプキンズは、たんに現代詩における詩的技巧の先駆者ではない。自然と人間と神(この場合は人魚)のトリニティの知覚から、神秘的な想像体験、ユニークで個性的な心象風景(インスケイプ)の創造を、この詩で実験している。ここでは、自然と人間の融け合った、あたらしい人魚像を、ホプキンズが創始したといつてよいだろう。こうしたテキスト解説のうえに立ったとき、はじめて「人魚の幻」の、複数人魚の出現、髪の色が多様性、水・陸・空に自由に行動する変幻性、人間的悲哀の感情の賦与などの謎が解けてくるだろう。

第五章 (三)

異次元の悲劇

——S・ヒーニー「ミディアン・マール」——

ミディアン・マールは、アイルランド語で〈人魚〉の意味である。「イエイツ以来のすぐれたアイルランド詩人」といわれるシェイマス・ヒーニーの特質は、牧歌的な故郷の田園生活を脅かす暴力やそれに伴う民衆の悲惨さをえがくことだった。アイルランドを、より広い歴史的視野でみて、相つぐ侵略の犠牲となった故郷と住民へのふかい愛着がある。しかも、その詩の背景には、育った環境——美しい北国の海、沼地、泥炭、農民生活、昔からのアイルランド神話、民話が息づいている。「ミディアン・マール」の人魚譚には、伝説を基礎に、かれ独自の工夫がある。『冬越して』(一九七二年)に収められたこの詩は、たんなる人間男と人魚の異類婚ではない、迫害された人魚への愛と同情がリアルに描かれている。

いま女は眠る、冷たい乳房を

引き潮に 洗われ、

髪の毛をたかく 編みあげたまま。

波にのり ゆるやかに 漂流物は

女のすねや 腿のまわりに 打ちあがる。

泡ふく腕環は、ただよう海藻を

とらえては、また そつと放す。

暖炉とベッドの 地上の八年の

年月のあいだ 人界に染まり乱れて

帰郷した 最初のふかい眠りなのだ。

魔性のドレスも まだ ほとんど

わだつみの色に 染まったまま。

(第一部)⁽¹⁷⁾

三部構成の、この詩の第一部は、いまは死んでしまつて波に洗われるままの〈人魚〉の現状をしめしている。この死の謎を解くことばは、〈魔性のドレス〉だろう。海の妖精が水浴中、人間の男が、その衣を盗んだために、人魚は海に帰ることができず、心ならずも男と八年間、陸上で暮

す運命となる。日本の羽衣伝説と似た話である。

男は 女の衣服を 盗んだ

髪の毛を すいているあいだに。

つけて行くのが、女には精いつばい。

男は女の衣をかくした 軒したに。

それから女を誘惑した、四方は壁、

暖かい床、夜ごとの男の愛

潮騒の ひびくところで。

女は 乳と分婉を経験した。

女には どうしようもなかった――

あれこれ故郷を おもいうかべたが。

その声から やがて波音が消えていった。

(第二部、一―十二)⁽¹⁸⁾

第二部は、人魚が地上の男につかまり、大事な〈衣〉^{ガイメント}をかくされ、男の妻となり、子供まで生む破目になったいきさつをつたえている。女の脳裏からは、なつかしい海底の故郷の記憶が薄れていくが、けつして忘れたわけではなかった。転機は、思いがけず訪れる。屋根ふき職人がきて、

この〈衣〉を麦たばのなかにふきこんでしまった。この話を子供たちが聞いて母に知らせる。後悔と孤独のうちに過していた人魚にとっては、吉報である。じぶんの子供でさえ、故郷恋しのかの女には、ほど遠い存在だった。人間世界に未練のない人魚は、夜闇にまぎれて〈泡だつ海〉に入り帰ろうとする。その際、かの女は、かびのはえた藁わらぶき屋根から、〈煙スモーク・リクくさい衣〉を身にまとい、海中に入るのである。人魚の死の理由は、したがって、フォスターのいう「魔法の衣がないため、たぶん溺死した」⁽¹⁹⁾のではないだろう。ただ、この作品がたんに、古い民話の焼き直しではなく、そのテーマを「食肉獣、強姦者、破壊者としての男と、生命を与えるものとしてでなく、後悔し、畏にはまり、抑圧され、逃避を望む女」⁽²⁰⁾との関係に求めているのは興味ぶかい。そこに、迫害者と被迫害者、侵略者と被害者とのヒーロー的構図があるからである。

では、真の死因はなんだろう。これは、ワイルドの『漁夫とその魂』、アリングガム「エルフィン・メーアの人魚」にもみられるように、〈水の精〉は、異次元の人間男と結婚した場合は、同族から受け入れを拒否され、死の制裁をうけるからだろう。いまや、人魚は、婚姻を強いられたに

せよ、すねや腿に海藻を付着させた屍体となって漂流するだけである。ヒーローは、この虐げられた人魚に、被圧迫者のアイルランド人の運命を重ねて、愛情をもつて描いたとしかおもえない。

夜風のなか、泡だつ海に女は入り、
麦かびや 白かびの幾重にも

ふいた わらぶき屋根から

煙くさくなつた衣を 出して着た。

そこに 永久に 男の秘密や

つまらない漁夫の女房たちの噂や

寝室のつめたい把手

夜と昼の恐怖

子供の刷毛や くしを

海の水に 浸してみた。

いま女は眠る 冷たい乳房を

引き潮に 洗われたまま。

(第三部)⁽²¹⁾

哀れな人魚の一生をつたえたこの詩には、神話、歴史、

文化人類学への関心を詩にもちこんだヒーニー、血を血でもって洗う部族抗争と報復への嫌悪をもつ彼の片鱗が、のぞいている。この詩のある『冬越して』の詩集には、「海辺の女」「リンボ」という海にちなむ作品もあり、とくに後者の、母によって海に棄てられた私生児が、鮭網にかかる設定は痛ましい。

貪欲な男の情欲の犠牲となる〈水の精〉としては、ギュスターヴ・クリムト《人魚一族》(二八九八)がおもい出される。ここでは、男性の魚に、つぎつぎと裸女が波に流されながら喰べられていく。《犠牲者》として〈水の精〉の構図が、動的にパセティックに描かれている。このように、人魚伝説が長い歴史にわたって、各時代の詩人たちに歌いつがれ、現代の社会派詩人にも、まじめなテーマとして取りあげられているのは、驚きである。しかも、古代・中世の《異端と邪悪と情欲のシンボル》としての人魚が、現代に近づくにつれ、むしろ、《殉情で運命に流される被害者》として美しいヴィーナス的な水の精のアーキタイプとなっていることは、注目に値する。おそらく、人類のあるかぎり人魚という記号表現は、さまざまな意味・解釈の変遷をづけ、ゆたかな記号意味を生成発展させながら、永遠に

魅惑的な存在、運命の女のアーキタイプとして生きつづけることだろう。

つまり、〈水の精〉は、人間の歴史とともにあり、生と死、美と醜、善意と邪悪、正統と異端、清純と欺瞞、女神と娼婦のような複雑でマルチの様相で人間を眩惑しつつ、美的快楽と活力をあたえてくれる文学・芸術の永遠のテーマといつてよい。

《注》

- (1) この詩の底本としては *Chasteland, A Tragedy in The Tragedies of Algeon Charles Swinburne in 5 vols.* (Chatto & Windus, 1905), vol. II を用いた。
- (2) Jean Overton Fuller, *Swinburne, A Critical Biography*, Chatto Windus, 1968, p. 87.
- (3) G. Benwell & A. Waugh, *Sea Enchantress: The Tale of the Mermaid and Her Kin*, (Hutchinson, 1961), p. 89.
- (4) *The Athenaeum* Dec. 23, 1865.
- (5) Jean Fuller, *op. cit.*, p. 89.
- (6) 『ヴィーナス賛歌』については小著『宿命の女』(平凡社、一九八七年) 参照。

- (7) Donald Thomas: *Swinburne. The Poet* (Oxford U. P., 1979), p. 87.
- (8) Gerard Manley Hopkins, *A Vision of the Mermaids*, 1—18.
 Norman H. Mackenzie, *The Poetical Works of Gerard Manley Hopkins* (Clarendon Press, Oxford, 1990) ㊦㊧㊨㊩㊪㊫㊬㊭㊮㊯㊰㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿
- (9) Stephen Spender and Donald Holl (ed.), *The Concise Encyclopedia of English and American Poetry* (London: Hutchinson, 1970), p. 129.
 Bernard Bergonzi, *Gerard Manley Hopkins* (Macmillan, 1977), p. 7.
- (10) Hopkins, *A Vision of the Mermaid*, 27—37.
- (11) *Ibid.*, 48—55.
- (12) *Ibid.*, 116—131.
- (13) Bergonzi: *op. cit.*, p. 7.
- (14) Graham Storey, *A Preface to Hopkins* (Longman, 1981), p. 63.
- (15) Jerome Bump, *Gerard Manley Hopkins* (Twayne Publishers, 1982), p. 24.
- (16) A. Bullock & R. B. Woodings (ed.): *Twentieth Century Culture* (Harper & Row, 1983), p. 312.
- (17) Seamus Heaney, *Wintering Out* (Faber and Faber, 1972) ㊦㊧㊨㊩㊪㊫㊬㊭㊮㊯㊰㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿
- (18) *Maighdean Mara*, I.
- (19) Thomas C. Foster, *Seamus Heaney* (Twayne Publishers, 1989), p. 44.
- (20) *Ibid.*
- (21) S. Heaney, *op. cit.*, p. 69.
Maighdean Mara, III.